

贖罪の日

「彼は至聖所の贖いをする。また会見の天幕と祭壇の贖いをしなければならない。また彼は祭司たちと集会のすべての人々の贖いをしなければならない。」(レビ記 16:33)

贖罪の必要性

「贖罪」ということは(《へ》キップリム)は「おおう」を意味する「カファル」という動詞から来ている。このことばは犯した悪に相当する額を支払う、または「賠償をする」ことによって罪はおおわれる、あるいは目の前から取除かれることを意味している。神に対して犯した罪とそのため負債をおおうためには償い(贖罪)が必要である。罪には償いが求められる。なぜなら罪はことごとく神への反抗だからである(出30:12, 民35:31, 詩49:7, イザ43:3の「身代金」の原理に注意)。

(1) 罪に対する償い(贖罪)がなければ、イスラエルの民は神のさばきを受けなければならない(⇒ロマ1:18, コロ3:5-6, 1テサ2:16)。神は完全に聖く正しい方で罪を見過すことはなさらないから、刑罰を下されるのである。そして罪は神の完全な特性に反抗することなので、最も重い刑罰である死が科せられることになる。贖罪の日の目的は、前の年にささげられたいけにえでおおわれなかった罪を全部おおうことのできる一つの最高のいけにえをささげることだった。そのことにより、人々は霊的にきよめられ罪を赦される。また神の怒りを避けることができる。けれども最も大切なことは、贖罪の日によって人々と神との関係が維持されることだった(レビ16:30-34, ヘブ9:7)。

(2) 神は人々を赦そうと思われた。そして人々との関係を維持するための方法を提供され、人々の心に働きかけてその究極の目的を達成しようとした。そこで罪のないのち(動物)のいけにえを人々の代りに受入れて救いの道を備えられた。この動物はその血によって罪を「おおつ」て人々の罪過を背負い、人々が受けるはずの刑罰を受けたのである(レビ17:11, ⇒イザ53:4, 6, 11)。

贖罪の日の儀式

レビ記16章にはユダヤ人にとって一年で最も重要で神聖な日である贖罪の日のことが描かれている。この日に大祭司はまず水でからだを洗って自分を整え、特別に作られた神聖な衣服を着る。それから人々の罪のために償い(贖罪)をする前に、自分自身の罪のために雄牛をいけにえにしてささげる。次に二匹の山羊を取り、くじを引いて(当時の物事を決める一般的方法)どちらがいけにえとなり、どちらがアザゼルの山羊になるかを決めた(レビ16:8)。大祭司はいけにえの山羊を殺して、その血を携えて垂れ幕の背後にある至聖所に入った。そして契約の箱の「贖いのふた」の上にその血を振りかけた。これは契約の箱の中にある律法の板と神との間に血を置くという意味である。神はこの祭司の方法を受入れてくださる。こうして人々が破った律法を血がおおったのである。この儀式によって民族全体の罪が償われた(レビ16:15-16)。最後に大祭司は生きていた山羊を取り、その頭に両手を置いて、全イスラエルの赦されていない罪を全部その上に告白した。それからその山羊を荒野に追出した。この追出された山羊は人々の罪が取去られ、荒野に消えていくことを象徴していた(レビ16:21-22)。

(1) 贖罪の日は最も厳粛な集まりの日だった(レビ23:7)。人々は断食(食物を食べない)をし仕事をしないで、神の前にへり下った(レビ16:31)。イスラエル人がこのように応答したのは、罪の厳粛さと償い(贖罪)のいけにえは心から悔い改める人にしか効果がないことを理解していたからである。悔い改めた人々は自分たちの犯した罪を深く悲しんだ。さらに罪を退け神に立返り、忠実に従う決意をしたのである(民15:30, 29:7)。

(2) 贖罪の日は、前の年に償われなかった罪と罪過を全部おおうことになった(レビ16:16, 21)。これは同じ方法で毎年繰返さなければならなかった。

キリストと贖罪の日

贖罪の日には主イエス・キリストのご生涯と動きを指し示す象徴が満ちている。新約聖書の中でヘブル人への手紙の著者は、贖罪の日の儀式の予型(預言的象徴)が新しい契約の中に成就したことを示している(ヘブ9:6-10:18, →「旧約聖書のキリスト」の項 p.611)。

(1) 旧約のいけにえの儀式が毎年繰返されなければならなかったということは、それが一時的なものだったことを示している。そして、告白した罪を全部永久に取除くためにキリストが来られるときをあらかじめ指し示していたのである(⇒ヘブ9:28, 10:10-18)。

(2) 二匹の山羊は、キリストによって最終的に完全に成就された贖罪(罪のおおい)と赦しときよめを象徴している。また神と和解(正しい関係に回復される)してほしいという人類に対する神の強い願いを示している。神は人類が回復され再び神と一つになることを願い続けておられる。キリストの死はその和解を提供するものだった。殺された山羊は罪の代価として私たちの代りに死なれたキリストの犠牲を象徴している(ロマ3:24-26, ヘブ9:11-12, 24-26)。人々の罪を背負って荒野に追いやられたアザゼルの山羊は、キリストが私たちの罪と罪過を背負われたことを表している(Ⅱコリ5:21, Ⅰペテ2:24)。私たちの刑罰を受けられたので、キリストは私たちの中から罪と罪過を取除くことができになる。そこでキリストの赦しを受け入れ、自分勝手な道から立返り、キリストに従う人はみなその罪から解放されるのである(詩103:12, イザ53:6, 11-12, ヨハ1:29, ヘブ9:26)。

(3) 贖罪の日のいけにえは罪を「おおった」けれども実際に罪を除くことはできなかつた。けれども、キリストが十字架の上で流された血は人類に対する神の最高で完全な償いである。それは罪を永遠に取除いてくれる(⇒ヘブ10:4, 10-11)。キリストの罪のない生涯が完全な犠牲を提供したのである(ヘブ9:26, 10:5-10)。私たちのために犠牲となったキリストのいのちこそが私たちの罪の刑罰を完全に支払うことができた(ロマ3:25-26, 6:23, ガラ3:13, Ⅱコリ5:21)。キリストの贖罪が神の怒り(正義の怒りと刑罰)を取除き、私たちを神と和解(回復)させ神との交わりを回復させるのである(ロマ5:6-11, Ⅱコリ5:18-19, Ⅰペテ1:18-19, Ⅰヨハ2:2)。

(4) 大祭司が血を持って入って行った至聖所は天にある神の御座を象徴している。キリストは死んだ後、この天の「至聖所」に入り、ご自分の血を神の御座に携えて行って私たちのために償い(贖罪)をされたのである(出30:10, ヘブ9:7-8, 11-12, 24-28)。

(5) 動物のいけにえは罪に対するキリストの完全な犠牲を示す預言的象徴だった。もはや動物のいけにえは必要ではない。十字架でのイエス・キリストの死がそれを全部帳消しにしたのである(ヘブ9:12-18)。それで使徒ペテロは「キリストも一度罪のために死なれました。しかし、私たちが神のみもとに導くためでした」と言っているのである(Ⅰペテ3:18)。

ヘブ9:12-18の文脈から、贖罪の日の儀式は、動物のいけにえを燃やすことと、大祭司が血を持って至聖所に入ることを指している。キリストの死は、動物のいけにえの儀式を完全に代り、神と人類との和解をもたらした。ヘブ9:12-18は、キリストの死が贖罪の日の儀式を完全に代り、神と人類との和解をもたらしたことを示している。

ヘブ9:12-18の文脈から、贖罪の日の儀式は、動物のいけにえを燃やすことと、大祭司が血を持って至聖所に入ることを指している。キリストの死は、動物のいけにえの儀式を完全に代り、神と人類との和解をもたらした。ヘブ9:12-18は、キリストの死が贖罪の日の儀式を完全に代り、神と人類との和解をもたらしたことを示している。